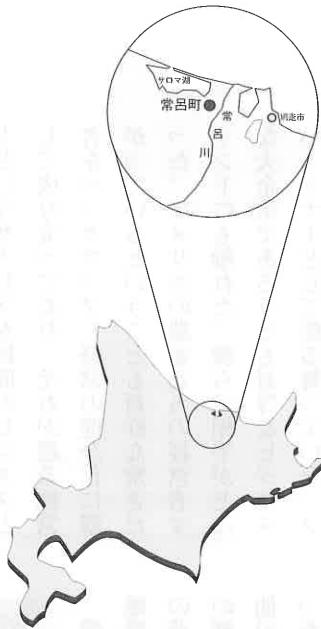


# 「この人この経営」



## 第2回 村の豊かさを未来につなぐために



### 小野寺俊幸さん(47歳)

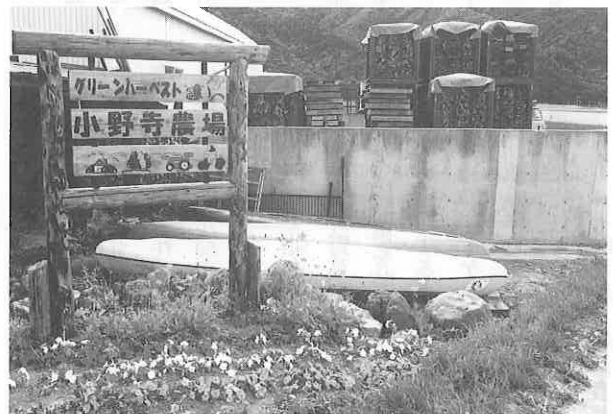
〒093-0333北海道常呂郡常呂町福山354  
☎0152-56-2450

#### 【プロフィール】

昭和26年常呂町生まれ。酪農学園卒業後アメリカで1年間研修。農協4Hクラブ、青年全道部長を歴任、平成6～8年まで「北海道土を考える会」3代目会長。現在JA常呂理事。「土地は個人のものではない」「競存共栄」がモットー。自家経営の他、地域内の離農地で仲間との共同経営を行い、地域農業発展の可能性を模索している。

知床半島から網走を経て宗谷岬に至るオホーツク海沿いの海岸線には長い砂浜や砂嘴で封じ込まれた塩湖が点在する。大雪山系を源にした幾筋もの川が運んだ土を冬の親潮と夏の宗谷暖流が海岸沿いに堆積させたものである。ミネラル分に富む水と土は川の流域に肥沃な沖積地と豊穡の海をもたらした。サロマ湖のホタテ養殖の成功もその豊かな土と水が可能にしたものである。そして、夏の日照と気温に恵まれた斜里、網走、北見、常呂などの地域は農業地帯として今後さらに発展することが予想される。

小野寺俊幸さん(47歳)の住む常呂町は、網走からオホーツク海沿いの道を稚内に向かって約50km。さらに常呂川河口に開けた常呂町の中心部から約15kmさかのぼった場所に小野寺さんのお宅があった。約31haの畑作経営者である小野寺さんの経営は、玉ねぎ、加工用馬鈴薯、ビート、麦などの加工原料あるいは貯蔵性のある作物が主体だ。20年間バレイショを連作してもソウカ病が発生しないという土壌や夏の気象条件を活かして、野菜産地としても発展することを目指している。しかし、それを実現するためには消費地に



小野寺農場以外に離農地を使った共同経営の生産組織を作り、将来の地域農業をリードしていく存在になろうとしている

遠い物流面での制約や労働力問題、さらには生産者の意識を含めた地域の改革が必要だと小野寺さんは考えている。

小野寺さんは22歳の時に国際農村青少年交換留学制度でアメリカのニューイングランドに1年間の研修を体験した。酪農家やポテト農場でも研修を受けた。しかし、小野寺さんにとって幸運だったのは、民間の乳質検査員の家とライムトラックと呼ばれる施肥設計から肥料販売と散布までを請け負うコンサルタントの家庭にホームステイしながら研修を受けられたことだった。コンサルタントという立場から沢山の農業経営と経営者たちを見ることがで

きたのだ。さらに、農業コンサルタン  
トというサービスが民間のビジネスと  
して成り立っており、それが農業経営  
者をバックアップし経営の健全化に繋  
がっているということも新鮮な驚きだ  
った。アメリカの農家たちの経営者マ  
インドにも触れた。彼らは相手がどん  
な大企業であろうとも対等なビジネス  
パートナーとして振る舞っていた。ク  
ールな計算をしながらもマーケティング  
グテーマを共有し、共通の目的のため  
に農家と関連産業が市場開拓をしてい  
く姿を見てきた。

## 外部との出会いで壁を壊す

常呂町では営農の行き詰まりによる  
離農というケースはほとんどない。そ  
の背景には豊かな自然条件と農協運営  
の健全さもあるのだろう。それだけに  
他の地方のような規模拡大も進まなか  
った。しかし、高齢化は確実に進んで  
いる。小野寺さんは個人経営を越えた  
法人化された大規模農業経営への準備  
が必要だと考えている。そうした法人  
経営の成立が地域農業をリードしてい

くと考えているからだ。子供だから譲  
る資産の継承ではなく、農業と地域の  
永續性のために優れた農業経営者に経  
営を託せる新しい農業経営を創り出し  
ていくためである。

すでに、機械の共同利用組織をきつ  
かけにして集まった仲間とグリーンハ  
ーベストという農業生産組織を作り、  
離農した農家の土地を借り、府県需要  
者に向けたハクサイ・キャベツなどの  
野菜の契約栽培にも取り組んでいる。  
また、グリーンハーベストの婦人たち  
の取り組みとして、無加温のハウスで  
無農薬栽培でのピーマンなどハウス野  
菜の生産にも取り組み、産直の形で販  
売が始まっている。切り花のカサブラ  
ンカの栽培も今年で4年目になる。

また、小野寺さんはカルビーのポテ  
トチップス用パレイシヨを生産する農  
家として道内のトップレベルの品質と  
収量を誇るだけでなく、農家との共通  
の利害を語り合える代表的な農業経営  
者として企業からも信頼を受けてい  
る。昨年暮れと今年の春には同社の  
人々とともに、オーストラリアに新品  
種のパレイシヨの植え付けと収穫作業  
を視察してきた。今年の夏にはアトラ  
ンティックという新品種を試験栽培す  
る小野寺さんのところにオーストラリ  
アの生産者を迎えて意見交換をするそ  
うだ。

昨年暮れのオーストラリア旅行の時  
には、皆と別れ一人でニュージーラン  
ドの野菜生産の状況を見てきた。その  
時、日本向けのカボチャを作る農家を  
訪ね、彼らが日本のスーパーでの消費  
動向を適切に把握し、品種の展開方向  
までも熟知していたことにショックを  
受けたという。カボチャ産地である北  
海道農家のどれだけの人々がそんな認  
識を持っているか。さらに、ニュージ  
ーランドの産地から日本の港に届くコ  
ストと日本国内とりわけ北海道から府  
県の大消費地に届けるための物流コス  
トの大きな差を考えると、農業生産の  
合理化だけでは解決の付かない大きな  
壁があることを感じたからだ。

しかし、小野寺さんは言う。

「北海道人が作ったエア・ドゥって  
会社あるでしょ。彼らの飛行機は飛び  
ました。壁は壊せるのですよ。それに  
僕らが北海道で作ったカルビーのイモ  
は専用船で鹿児島工場に送っている  
のですよ。ずっと安い物流コストでね。  
道内消費だけで北海道の農業は成り立  
ちません。生鮮野菜であればなおさら  
農協に予冷設備を装備するだけでな  
く、物流を担当する企業と手を携えて  
もつと共通のマーケティングテーマを  
持った仕組み作りを考えていくべきで  
す。現在に安住しては減るべきでし  
ょう。リーダー的な農業経営者が育つ



・物が薬マなや、取選と  
ネ畑た無ビマ売まものう  
タの性すのト直。培。経よ  
・など女すのニ地。栽。け  
イネのドでミ産い花み、広  
のり培・のてり組を  
載ンどっ切り肢を  
して



昨年は3度にわたる大雨の被害でタマネギ・パレイショなどはほとんどが水に流されてしまう被害を受けた。そのために秋のプラウ耕が遅れ、今年の麦作に影響がでるのではないかと心配されたが今年の夏作は全てが順調である。度重なる水害は常呂の人達の悩みの種であるがそれは同時に常呂町に豊かな沖積土層をもたらすものでもある

ていくことは必要です。でもね、優れた一人の経営者が強くなるだけでは駄目なのです。村の皆が高い位置を目指して成長していかないと。だって、いくら農業が発展したとしても村に人が

なくなると、自分の葬式が上げられなくなったり、子供たちが学校で友達

を作れなくなったら寂しいじゃないですか。そんな村にはしたくない。」

### 山に木を植える漁師のように

今回、小野寺さんを訪ねるのに、北

海道の中央部にある上富良野町から常呂町に入った。車を飛ばして約4時間半の距離だった。東京の雑踏に住む者からすると、国道といえども行き交う車が数えるほどしかない北海道の広さを感じた。しかし、小野寺さん宅を辞して女満別空港まで1時間。さらに空路で羽田まで2時間。常呂町から東京までの時間的距離は上富良野よりも近かった。常呂にいても、そして日本の何処に暮らしていたとしても、自ら動き、自ら働きかける意思があれば、我々はどこにでも行け、誰にでも会えるのだ。

かつて、人は1里(約4km)先に行くのに徒歩あるいは馬車で1時間かかった。車で数分の10km先の村でも、その場所に2時間半分の距離感を感じて生きていたのだ。すでに、交通手段は発達し、TVや電話だけでなくインターネットを使えば全くの時間差を感じずに世界中の情報を居ながらにして手に入れることができる時代になっている。しかし、現在に安住し、意識の上で村社会の外に出ようとせず、村や農業の外にいる人々や世界に出会うことを恐れている人々の精神的距離感では、1里はまだ1時間の距離なのである。しかし、村人がそして農業者たちが、自らに誇りを持ち自らを失わずに

外の異質な世界に出会う勇氣を持てば

その距離は一気に近づく。そしてそれが地域を変えていくのだ。

小野寺さんは、村の仲間を外に連れ出し、また、外からも人々を村に呼び込み続けている。研修に受け入れた東京の女子大生が常呂で就職をし、町の青年と結婚したりもしている。様々な農業の周辺業界人との交流や共同のイベントを開催することにも熱心に取り組んできた。グリーンハーベストで出る利益は生活費には充てず、会員夫婦の海外研修の費用として使ったりするのもそのためである。

そうした活動を通して、外部の力が農村を変えるだけでなく、同時に農業が都市や日本の産業のあり方を変えていくことにもつながると小野寺さんは考えているのではないだろうか。

「自然の恵みによって与えられたサロマ湖の漁師たちが、自分たちの漁を守るために自ら上流の山に木を植え始めているのです。僕らも同じことなのだと思います。」

それは、山に与えられ、土に生かされ、食べる人に守られている己を自覚し、常呂の豊かな土を守り、村の暮らしを守り、そして食べる人々を含む農業の同業者たちとともに、未来のための植樹しようとする小野寺さんの農業経営者としての誇りなのである。